

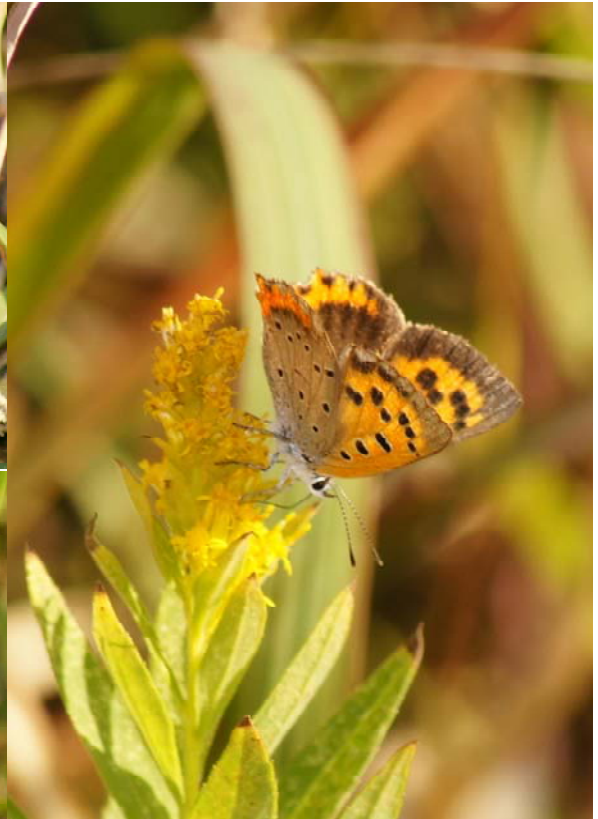
# 牛久：学校周辺に見る自然

第14号 みずべ公園，牛久自然観察の森

2015年11月15日発行

< 秋から冬へ >

みなさん、こんにちは。今回は、秋から冬への移り変わりを感<sup>う</sup>じた生きものたちを紹<sup>しょう</sup>介<sup>かい</sup>します。



交尾中のオンブバッタ(左上)とセイタカアワダチソウの蜜を吸うベニシジミ(右上)、冬眠が近くよたよた歩きのアマガエル(左中)、産卵に備えエサを食べるジョロウグモ(下2枚)。

スポーツの秋、芸<sup>げい</sup>術<sup>じゆつ</sup>の秋などといわれますが、生きものたちにとっての秋は、厳<sup>きび</sup>しい冬を乗り越えるための準備期間とも言えます。大部分のバッタの仲<sup>なか</sup>間は卵で冬を越<sup>こ</sup>すため、秋には食<sup>しょく</sup>欲<sup>よく</sup>旺<sup>おう</sup>盛<sup>せい</sup>になり、交尾<sup>こうび</sup>をします。クモの仲<sup>な</sup>間はど<sup>う</sup>でし<sup>よ</sup>う？ ジョロウグモのように網を張<sup>あ</sup>るクモの多<sup>あ</sup>くは卵で越<sup>こ</sup>冬し、そうでないものは半冬眠<sup>とうみん</sup>の状<sup>じょう</sup>態<sup>たい</sup>で冬越<sup>こ</sup>しするものが多いよう<sup>う</sup>です。チョウは？ カエルは？ いろい<sup>ろ</sup>ろな生きものについて調<sup>て</sup>べてみ<sup>み</sup>せんか？ 秋の暮<sup>く</sup>らし方<sup>かた</sup>の違い<sup>ちが</sup>いにも結<sup>む</sup>び付<sup>つ</sup>いてい<sup>い</sup>くと思<sup>おも</sup>いますよ。



赤とんぼの仲間は他の多くのトンボと違い、卵で越冬します(第6号)。写真はノシメトンボのオスですが、もうはねがボロボロ。敵に襲われたりしながらも、懸命に生きてきたしるしですね。

そして今年は例年より少ないかなと思っていたウラナミシジミ。仲間を増やしなから北海道南部まで広がりますが、房総半島あたりまでの温暖な地域でしか冬を越せず、死んでしまうそうです。



秋も終わりに近づき、はねがボロボロになったノシメトンボのオス(上)。

仲間を増やしなから北海道南部まで北上するが、関東南部以北では冬を越せず死んでしまうウラナミシジミ(下2枚)。



イヌツゲの植えこみには、オオカマキリがいました。たぶん産卵も終え、今年はそろそろ最後に見るカマキリになるかなと思いつつ観察していたら、何だかカマキリも「子どもたちをよろしく」とお別れのあいさつをしているように見えてきました。カマキリは卵で冬を越し、親は子がふ化する春を迎えることなく死んでゆくのです。

イヌツゲの植えこみにいたオオカマキリ。

みずべ公園の池には、冬鳥のコガモが来ています。が、オスの羽毛はなんだかもうがはっきりせず、うす汚れた感じがします。これはコガモの「衣がえ」で、夏の羽から冬の羽に生えかわっている途中なのです。これからだんだんに、美しいオスのもようが現れてきますよ。いつも池にいるカワウも、冬の繁殖期には頭と腰に白い羽毛が生えてきます。

【理科支援員：宮内】



「衣がえ」が進み、だんだんもようがハッキリしてきた冬鳥のコガモ(左)。

繁殖期の白い羽毛が出てきたカワウ(右：右側のカワウ)。